四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol 54

人の名前がついた川

愛媛県　松山市長

中村（なかむら）　時広（ときひろ）

近年の雨は、どこかおかしい。

昨年も、平成6年の大渇水を上回るほどの異常少雨（4～6 月対比で、62%）に見舞われ、「週明けには、渇水対策本部を」と表明して程なく、短時日で300ミリを超える豪雨。渇水対策本部どころか、日曜日には災害警戒本部を設置し、石手川ダムは一転して放流の事態となった。

ある気象予報士が、最近の雨を「いまどきの言葉を借りるなら、キレやすい傾向が強まっている」と表現していたが、突然の現象に翻弄され、対症療法もなく、複合的要因が絡み合うなど、なるほど、と感じる形容である。

ところで、本市の最大河川は、古くは『伊予川』と呼ばれた暴れ川であり、キレる程の大雨に至らなくても、地形的な特徴（高い山と近い海）により、800年も前から何度も流路を変えてきた。

洪水に心痛める、初代松山藩主・加藤嘉明から改修を命じられた河川奉行・足立重信は、工法を駆使し、流路の付け替えや堤防の強化、また、築城の際には湯山川（現在の石手川）の流れを、伊予川に合流させる難工事に着手。巧みに氾濫を食い止め、新田が増え、松山繁栄の基礎を築いた。

“石手川　重信川の　青田かな”　虚子

重臣による偉大な功績を称え、伊予川は以後『重信川』と呼ぶようになったとされるが、司馬遼太郎氏をして「日本の河川で人名がついているのはこの川だけではないか」と言わしめたほど、全国的に珍しいようである。

重信川では名称のほか、周辺に点在する泉の伝説も残されている。130余のうちの「杖（じょう）の淵（ふち）」がそれ。長年大干ばつに悩むこの地を訪れた弘法大師は、唯一水をくれた老婆に感激し、錫杖を地面に突き立て念じると、こんこんと水が湧き出し、以来1200年間、枯れたことがないという。

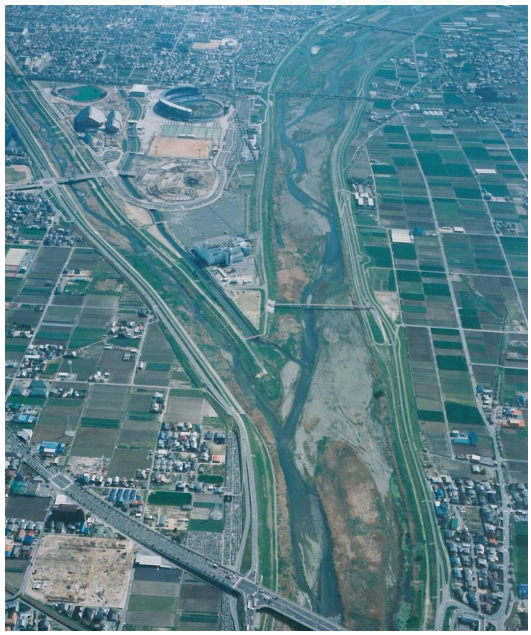
現代は、キレる雨に対抗できる河川奉行もいなければ、異常渇水に対応できる錫杖もない。しかし、日頃からいろいろなケースを想定しつつ、行政・市民が英知を集め、可能な限りの対策を講じることが、第二の重信、第二の錫杖に近付く道であると思う。

一時的な不足と一時的な過剰。松山は、水の貴重さをしみじみ感じる土地柄である。

終わりに、松山を終焉の地として選んだ、種田山頭火の晩年の句を紹介しておこう。

“濁れる水のなかれつゝ澄む”

弘法大師の伝説から命名された「杖の淵」



重信川（右）と石手川が合流する松山市出合付近